

〔海外學界動向〕

廈門朱子學國際學術會議

『朱子語類』の標點本刊行の噂を耳にしたのはいつだったかもう忘れたが、その時かなり驚いた記憶がある。ところがそれが實現した今日では當然の如く思えるのは、中國の變革全般が早足で進められ、それに我々が慣れたからであろう。近年の中國に於ける朱子學研究の進展は、十數年前には夢想不到に仕上がったことである。

廈門で開かれる朱子學國際學術會議の通知を受け取った時、國際學會はやりの風潮からしても當然の企畫だと思つた。一九八一年十月に浙江省杭州市で全國宋明理學討論會が催されたことがあつたが、その時から既に六年たつ。朱子學研究の條件は、當時に比べれば格段に好轉している。機は十分に熟しているはずである。

今度の會議は、一九八七年十二月二日から五日にかけて、

土田健次郎

福建省廈門市で舉行された。廈門大學は福建省を代表する總合大學で、今回ここが中心(主辨)になつたのは、朱熹のふるさとが福建省という理由もある。協讚(聯合發起單位)に江西大學が名を連ねるのは、朱熹の本籍地婺源が今は江西省に屬するからであろうか。協讚としては他に、中國哲學史會、福建社會科學院、福建社會科學聯合會、閩北閩學研究會、廈門社會科學聯合會、福建中國哲學史研究會の名が並ぶ。會議組織委員會主席は鄭學稼廈門大學副校長(歴史研究所所長)、祕書長は商英偉、高令印の兩哲學系副教授。高教授は、『福建朱子學』(福建人民出版社、一九八六、陳其芳福建師範大學副教授との共著)、『朱熹事跡考』(上海人民出版社、一九八七)の著書があり、閩學の中の朱子學研究を推進している學者で、今回の事務を中心になって取りさばかれた。また會議外事處主任

の一人姜國文教授(哲學系 羅<sup>ロレンツ</sup>輯學)は、我々外國人の接待に奔走された。

今回の参加者は百名を超える。中國以外では、アメリカ、カナダ、西ドイツ、ユーゴスラヴィア、日本、シンガポール、香港の各國から學者が参加した。陳榮捷教授は「總結」のおり、臺灣と韓國の學者の姿が見えぬのが残念だと述べたが、昨今の情勢を見ると、將來参加が實現する可能性も皆無ではあるまい。

まず會議の日程を左に掲げる。

(「」内は口頭發表で使用された言語、配布されたペーパーの言語と異なる場合があったので適宜附記した。斷りの無いのは全て中國語。英語、日本語による發表の場合は、その場で通譯が中國語に翻譯した。)

十二月一日

参加手續

十二月二日

開幕式

(午前)

廈門朱子學國際學術會議(土田)

任繼愈(中國社會科學院)

朱熹與中國傳統文化

沈善洪(杭州大學)

朱熹的基本思想及其價值

陳榮捷 Wing-tzi Chan (アメリカ・コロンビア大學)

朱子與大慧禪師兼論其他僧人 [中]

劉述先(香港・中文大學)

由朱熹易說檢討其思想之特質、影響與局限

何乃川(廈門大學)

延平三先生開闢學之先河

(午後)

虞愚(中國社會科學院)

朱子與儒家仁之界說的繼承和開拓

セオドア・ド・バリー Wm. Theodore de Bary (アメリカ・コロンビア大學)

Chu Hsi and the Mean [英]

高橋進(日本・筑波大學)

朱子における物と心と理—知識の成立と實踐の理論的

關係 [日]

モニカ・ユーベルホル Monika Uebelhor (西ドイツ・

マールブルク大學)

關於朱熹思想中用「禮」緩和社會衝突的概念

丁禎彥(華東師範大學)

朱熹認識論和思想方法中的合理因素

(夜、招待宴)

十二月三日

(午前)

溝口雄三(日本・東京大學)

「天人合一」在思想上的意義 [中]

コンラッド・シロカウアー Conrad Schirokauer (アメリ

カ・ニューヨーク市立大學)

History and Philosophy in the Thought of Zhu

Xi [英]

アイリーン・ブルーム Irene Bloom (アメリカ・コロ

ビア大學)

Lo Ch'in-shun and Materialism [英]

葛榮晉(人民大學)

東林學派和晚明朱學的復興

潘富恩(復旦大學)

重評朱熹的歷史觀

佐藤仁(廣島大學)

朱熹の心説について [日]

龔道運(シンガポール國立大學)

朱熹心學的特質

秦家懿 Julia Ching (カナダ・トロント大學)

Chu Hsi and Taoism [中]

蔣仁(閩北朱熹研究基金董事會)

試論朱熹學術思想在閩北產出的條件

王煜(香港・中文大學)

論朱熹對周公、文中子和唐太宗的褒貶

土田健次郎(日本・早稻田大學)

試論道學「道統論」的形成和特點 [中]

張立文(人民大學)

朱熹美學思想探析

(午後)

ビデオ見學(《鵝湖之會》《朱熹在閩北》)

劉君若(アメリカ・ミネソタ大學)

The Light in the Well, poetic visions of Zhu Xi

[中]

鄒永賢（廈門大學）

關於朱熹的治國思想和眞德秀的《大學衍義》

黃秀璣（アメリカ・ピッツバーク學院）

張載與朱熹 [中]

牛尾弘孝（日本・大分大學）

崎門の朱子學の特色―日本の思考 [日]

馮炳權（香港・中文大學）

朱熹對儒佛的判分

成中英（アメリカ・ハワイ大學）

On two Points of View in Neo-confucian Philo-

sophy: Chih-chih and Chih-liang-chih [中]

（夜、紀念李贄誕辰四六〇周年學術座談會）

十二月四日

バス見學（泉州開元寺、イスラム聖墓、マニ教草庵、等）

十二月五日

（午前）

岡田武彦（日本・九州大學）

活學としての朱子學 [日]

廈門朱子學國際學術會議（土田）

小島毅（日本・東京大學）

郊祀禮制與「天」 [中]

陳榮開（日本・廣島大學留學中）

朱子學と徂徠學との比較研究―四書の解釋を中心とし

た [中]

蒙培元（中國社會科學院）

略論朱熹的“天人合一”思想

申正（哈爾濱師範大學）

論朱子對仁字本義的闡發―兼讀《中國哲學的課題及其

意義》

黎昕（福建社會科學院）

從《四書集註》看朱熹對楊時理學思想的汲取和利用

張文修（中國社會科學院）

朱熹的佛家思辨形式與儒家精神

韓鍾文（上饒師範學院）

朱熹與王安石的比較研究論綱

祝瑞開（上海大學）

佛學與中國哲學的發展

樓宇烈（北京大學）

胡適的朱熹研究

陳其芳（福建師範大學）

朱子後學研究、福建朱子學

（總結）

陳榮捷

任繼愈

高橋進

鄒永賢

日本からの出席者を左に掲げておく。（敬稱略）

岡田武彦（九州大學名譽教授）、佐藤仁（廣島大學教

授）、高橋進（筑波大學教授）、溝口雄三（東京大學教

授）、牛尾弘孝（大分大學助教授）、土田健次郎（早稻田

大學助教授）、佐藤貢悅（筑波大學助手）、小島毅（東京

大學助手）

現地參加として、北京大學、南京大學に留學中の東京大學  
大學院生三名、中山大學に留學中の廣島大學大學院生一名。

發表時間は十五分、質疑をいれて二十分、發表者には評論  
者がつく豫定であったが、發表が總じて三十分近くなつてし  
まい、質疑の行なわれる時間はほとんどなかった。これは、

發表時間が事前に指定されていなかったため、發表者が長目  
の原稿を準備してきたからである。時間が押していた最終日  
の最後の方ともなると、その場で發表者を指名し十分～十五  
分ほど話させるといふ具合で、完全にプログラムを離れた形  
になった。それゆえ右の表のうち、陳榮開氏と蒙培元氏の間  
が一人だけ氏名不明のゆえ記されていない。當初配布された  
プログラムは極めてよくまとまっていて便利であったが、實  
際に發表されなかったものがかなりあり、逆に飛び入りの發  
表者もあった。また資料のコピーが間にあわなかったり、到  
着が遅れたといった理由から、順番が變更になったケースも  
あった。右の表は全て、實際に行なわれた發表のみを記した  
ものである。

大會の規模の大きさと中國の現状からして、運営面での多  
少の行き違いはやむを得ないことである。それはともかく、  
發表自體は力のこもったものが多く、また配られた提出論文  
の中にも貴重な研究があり、筆者にとっては收獲の多い會で  
あった。これらの發表の内容を全て紹介するには、紙數があ  
まりに足りない。それゆえここでは全般的な傾向を述べるに  
とどめる。（なお、煩を恐れ敬語表現は一律に省せていただく。）

おそらく一つ確實に言えるのは、以前ほど國別の色あい

はつきりしなくなつたことであろう。會期中、筆者は二つの中國の報導機關からインタビューを受けたが、その時強調したのは日本側發表者の内容の多彩さであつた。勿論今回の日本人發表者をもって日本の學界を覆い盡せるなどと言う氣は全く無いが、見本市的な意義はかなりあつたと思う。岡田博士は思想の內面的理解の重要性を強調し、朱子學的修養の行き着く先として「兀坐」を提唱したが、中國の嘗ての新理學以上に朱子學を直接繼承する態度のように思われた。また佐藤教授は朱熹の「心」の把握に考察を加え、文獻と思想上の脈絡から「全體大用」の思想上に於ける意義を究明した。高橋教授は朱熹の「理」の思想が唯物、唯心で單純に割り切れない獨自のものであることを哲學的に分析し、牛尾助教は朱子學を實踐する試みの顯著な例として崎門を取り上げた。朱子學の哲學的生命の強靱さを浮彫りにするこれらの議論は、中國の學者にも相當の印象をあたえたように思う。

また一方で溝口教授は中國思想の展開全般にわたる見通しをふまえ、朱子學の天人合一思想の形成と特質を歴史の場を考慮しながら究明した。小島氏も郊祀問題の整理と分析をもとに宋代の天人觀について思想的考察を行なつた。筆者は、従來の朱子學の道統論に對する通念を再検討し、道統論

形成の思想的要因と道統論の基本的性格をさぐつてみた。

朱子學の概念をそのまま使用しその哲學的核心に踏みこもうというもの、哲學概念とのつき合せから朱子學の特質をさぐりだそうというもの、朱子學の各主張の性格と効果を歴史の場に据えて明確化しようというもの等、様々な問題意識と方法が示され、そこにはおのづと各發表者の思想も窺えることとなり、日本側發表を聞くだけでも今回の會議參加の意味はあつたと感じられた。

筆者が報導機關に強調したのは、日本流朱子學研究ということが單純に言えぬこと、今度の諸發表は特に日本に於ける多様な研究方法を反映していること、その一つ一つに對する意見を中國の學者に聞きたいこと、等であつた。研究上の開放度とは多様性を容認できる寛容さをどれほど持ちえるかで計られるが、今回の日本側發表はその一例としての意味もあつたように思う。なお付言すれば、記者は二人とも朱子學の現代的意義を認めるかという問いを筆者に發し、朱子學研究がこの國に對して持つ直接的な意味を改めて感じた。

歐米側も、陳教授は文獻考證で押しまくつて、朱熹が同安にいた時潮州に遊び、そのおり潮州か梅州で大慧に會つた可能性を推測した。ド・バリー教授は「中庸章句序」に見える

道統論の内容を分析し、朱子學と佛教との「人心」把握の相違、「道心」把握の類似を指摘した。後者については特に善導の「白道」の比喩(『觀無量壽經疏』四)との相似に注目し、相互の影響關係の有無といった實證の枠を超えた中國思想における修養・救済のパターンそのものの一貫性を強調した。題目から見ても、他に歴史理論、文學理論、道教との關係、社會實踐、周邊の道學者との關係、明代朱子學と多岐にわたった。香港から参加した學者は、牟宗三、唐君毅兩教授の學統を繼承しながら、文獻上の實證にも留意していた。

肝心の中國側も、以前のような唯物、唯心の交通整理は影をひそめ、各研究者の個性が感ぜられる切り込みがみられた。そのうち注意を引いたのは張立文教授と蒙培元氏の發表で、題目こそ違え、朱熹の思想のもつ體驗の段階性を言うという點については類似が見られた。數段階の境涯を設けるのは新理學、更には王國維、また在米の中國人學者を想い起させ、段階の數のうえでも妙に形式的に整理しすぎている感をぬぐえないが、かかる方向は中國人が西歐の近代思想を知った後で自國の思想を再確認する時の自然に出てくる一つの型なのかもしれない。以前ほど唯物史觀の拘束が無くなった現在、このような議論が見られるのは興味をそそられる。とも

かくも今回のほとんどの發表で、唯物、唯心といった語すらも全くといってよいほど使用されなかったのには驚かされたが、これは明らかに意識的に避けたものであろう。

また今回の會議で非常に目を引いたのは、「閩學」の一環としての朱子學研究である。

推測するに今大會開催の意圖の一つに閩學顯彰があったようである。會議に先だって我々が寄贈にあずかった書籍の中に、『閩學研究』試刊(閩北閩學研究會、一九八七年十一月)と『上饒師專學報一九八六年第三期増刊 朱熹研究專輯』(上饒師專學報編輯部、一九八六年八月)があった。後者の刊行地上饒は江西省で、朱陸論争で知られる鵝湖はここからバスで少し行ったところである。本誌所載の趙炳熙「朱熹研究論著索引」は一九〇〇年〜一九八五年のものを整理しているが、「朱熹年譜滙錄」がついていて便利である。

前者は高令印教授の「閩學序説」を筆頭に二十編の論文が收められ、そのほとんどが朱子學と關係づけられている。そのうち、蔣仁・餘奎元「試論朱熹學術思想在閩北產出的條件」、楊青「立足武夷 面向世界 譜寫閩學研究新篇章」は、別に本會議の提出論文としても配布された。また本誌收載論文以外に、蔣步榮「道南理窟」、黃金鍾「朱熹與福建書院考

評」、丁東風「論朱子學對福建地區傳統文化的影響」、徐遠和「略論洛學的閩學化」も會議の提出論文中にあった。この閩學研究が目立ったことについては陳榮捷博士も「總結」の中で言及していたが、我々にとつて歓迎すべき現象であるのは疑いない。なお福建以外では浙江省淳安に於ける朱熹の活動についての提出論文が二篇あった。洪波「朱熹在淳安瀛山書院講學及其軼文墨寶考」、孫平、萬才「朱熹在淳安始末」であるが、洪氏は杭州大學、孫氏と萬氏は浙江省淳安縣志編輯室の所屬で、やはり地元で研究されているわけである。

さて、郷土研究といつても宋代となると基本資料が限られる不安があるが、これらの論文は從來から使用されていた文献以外は主に石刻や地方志、族譜に頼り、こちらの方面の新資料を強調するものが多い。その意義は決して無視されるべきではないのだが、ただこれらの資料としての價値の問題は終始つきまとうように思われる。また思想史、歴史、文學等各分野の研究成果を地域という枠内でいかに關連、總合できるかということについては、今の段階ではとにかくまず目ざましい具體的成果を示してからということになる。

筆者の淺學ゆえかも知れないが、興味深く思えたのは「試論朱熹學術思想在閩北產出的條件」で、蔣氏自身の口頭發表

廈門朱子學國際學術會議（土田）

もなされた。中唐以降の中原の動亂のため、難を避ける者が閩に入りこんでいくのだが、その要道としては次の三つが數えられる。一、分水關から崇安を通じて。一、杉關から光澤、邵武を通じて。一、仙霞をこえて浦城を通じて。これらのルートから閩に入るのだが、閩北の風光のよさと環境の安定から閩北に定着する者が出たとする。亂暴に言へば、應仁の亂によつて京の文化が地方に擴散したというようなことなのであろう。一九八五年十二月に筆者は閩北の朱熹ゆかりの地（建陽、考亭、武夷、五夫、崇安、閩北ではないが鶴湖）をまわつたことがあつたが、その時同行者の木田知生氏（龍谷大學助教）が崇安の言葉が普通話に近いのを氣にしていた。筆者もそのような印象を持ったので、崇安縣委宣傳部の丁麟征氏に崇安市にある他郷の會館についてたずねたところ、江西、福州、浙江の會館の名を挙げた。江西會館は今城南小學校になつている。つまり崇安は昔から交通の要衝であり、この丁氏も五夫の人民政府の責任者もみな他郷の出身であつた。以前は朱熹の生れ育つた土地の環境など二の次であつたものが、近年は「福建の山間地出身の下級官吏の息子」という形で思い入れをする傾向が顯著である。今後は更に一步進んで、この地の立地條件をより具體的に檢討することになる

う。

さて、『閩學研究』には、「籌集朱熹研究基金緣起、暫行簡章」の一文が載せられている。董事長を張震氏（中美蘭亭學院客座教授、福建大竹嵐蛇傷研究所所長）が勤めるこの閩北朱熹研究基金會は、一九八五年の冬に設立された。副董事長の朱蘭溪氏は朱熹二十四代の子孫で、過日考亭で偶然知りあい晝食の款待に與つたことがある。他に李侗、羅從彥、眞德秀の後裔もそれぞれ役員についておられる。

今回の會議の公用語は中、日、英ということであったが、通譯の不足もあり、まず言葉の段階で參加者相互の意志の疏通が妨げられることが多かった。全體的に見て中國語で發表したのが最も多數の理解を得られたように思う。専門家であれば少なくとも配布される發表原稿を読むことはさほど難事ではないからである。優秀な通譯のスタッフが不足の場合には、中國語を軸に國際會議を運営するのが、少なくとも中國思想に關しては最善のように思われた。

それと共に痛感したのは、情報交換の必要である。今回、朱熹と佛教、道教との關係についての論考が目だったが、特にこの方面に於て世界規模で現在までの研究の蓄積を共有できれば、かなりの勞力が省けるように思った。

任繼愈氏は「總結」の際、今回は各國の若い研究者の發表が見られたことに言及したが、當の中國側も大家に伍して研究生の清新な報告があり、今後の新たな展開の可能性を感じさせた。今回の會議には一種のセレモニーという要素も皆無だったわけではないが、中國にとつてはこのような出發の儀式が必要なのである。少なくとも筆者は、このように考えることで今回の會議の意義を更に強く納得できたのである。